在英日系ディアスポラの言語生活(注1)

—国際結婚した日本人女性とコミュニティの形成—

三　宅　和　子

1．はじめに

近年のグローバル化とデジタル・メディア技術の急速な進展に伴い、時空間が短縮し、海外の様子や出来事がきわめて身近なものとなりつつある。駐在、留学／遊学、起業、退職など、様々な契機で海外に渡り、永住する意思をもった日本語話者も増加している。筆者は、このような流動する社会の中で越境し、比較的長期にわたり海外に在住する日本語話者を、従来から研究されてきた海外の「日系移民」とは区別し、日系ディアスポラと名づけている。

越境する日系ディアスポラの早期の例として、本研究では1960年代、70年代に国際結婚して離日した女性たちを中心に行った探索的調査を報告する。老年期を見据えて形成されていった日系コミュニティ、日本語の保持と子供への継承、日本文化の規範や伝統へのこだわりと自己のアイデンティティなどの関係を探ることにより、国際移動の渦の中にある日本語と日本語話者の現在と未来を考える資料としたい。

2．グローバル化と日系ディアスポラ

移民（マイグレーション）には、外国からの移民（イミグレーション）と外国への移民（エミグレーション）の区別がある。日本における移民といえばこれまで、ハワイや南米など海外への移民（エミグレーション）が取り上げられることが多かった。また、一般の人々との関連が薄い、例外的な現象であるという認識が強く、日本が移民国家という位置づけや意識は形成されてこなかった。しかし、グローバル化の波は、かつての狭い意味での「移民」のみならず、経済や政治を始めとする様々な理由で人口が流動的に移動する国際移民の増加をもたらしており、日本も

例外ではない。近年は海外からの移民（イミグレーション）に関しても注目が集まるようになってきた。建築現場や工場での労働力不足を補う外国人労働者、農家の後継ぎ問題にからんだ農村花嫁、高齢者の介護を担う人々などの増加にともなうあらたな移民への関心である。

日本における移民研究は、これまで、ハワイや南米などの早期日系移民の研究や、移民言語の研究において成果の蓄積をもたらしてきたが、近年はより多様な分野で移民に関する研究が盛んになっている。アパデュライ（1996; 2004）の影響を俟つまでもなく、グローバル化とディアスポラの関係を論じた文化人類学と社会学的論考の刊行が日本でも続いている。カールズ＆ミラー（1993; 2011）は、社会学の立場から国際的な移民がグローバルに広がっていることを指摘した早期の研究である。

新しいタイプの在外日系人の研究も増加している。在米日本人家族の教育戦略、アイデンティティ、能力や感情に与える影響を研究した額賀（2013）、日本の若者を文化移民として捉えた藤田（2008）、国際化の中の日本人の「個」を問うた岩崎（2007）など、社会学、文化人類学、教育学、メディア研究などからのアプローチがある。言語研究では多言語社会研究（2008、2010）のように、海外への移民および海外からの移民と言語の特集を組む学術雑誌も出てきている。 日本語教育の分野では、川上郁雄が「移動する子どもたち」研究を牽引し、川上編（2013）をはじめ、日系児童の日本語教育に関する多くの成果をあげている。

本研究は、このような新しい日系移民の研究のひとつに位置づけられる。国際結婚して永住し、迎え来る老齢期を見据えて日本人コミュニティーを形成、活動する日系ディアスポラの現状と「ことばとアイデンティティ」の問題を探求する。

3．イギリスにおける日系ディアスポラ・コミュニティの形成

3－1．イギリスの日系移民

イギリスへの最初の移民は、1863年、長州藩の5人の若者が日本国の存続をかけてイギリスに密航したことから始まると一般的にいわれている[(注2)]。その後、官吏や留学生をはじめ、ビジネスマン、職人、芸人など様々

な職種の日本人がロンドンに住むようになり、1900年にはその数は500人を超えていたといわれる（Itoh 2001）。

第1次世界大戦を経て日本とイギリスの関係はさらに深まり、多くの日本人がロンドンを中心にイギリス社会に溶け込んでいった。しかし第2次世界大戦を機に両国間の緊張が高まり、長いイギリス生活に終止符を打って日本に帰国した者も少なくなかった。戦後、1951年のサンフランシスコ平和条約で公的には日英関係は正常化したものの、多くの日本人が再渡航し始めるのは、1960年代以降の高度経済成長期まで待たなければならなかった。外務省領事局政策課（2012）によると、現在のイギリスの在留者は推計で63,011人。アメリカ、中国、オーストラリアに次ぐ第4位である。その過半数以上の36,717人がロンドンに住んでおり、ロサンゼルス、上海、ニューヨークに次ぎ第4位となっている。また、永住者約12,000の8割以上がイギリス人男性と結婚をしている日本人女性だといわれている。

３－２．英国日本人会の結成

このようにロンドンには多くの日本人が集中的に居住しているが、日系移民のための相互扶助を旨とするコミュニティは組織されてはこなかった。Nippon Club（日本クラブ）のように、在英邦人に対する健康管理や子弟に対する教育の場の提供、スポーツや趣味・娯楽・文化活動を通じ、日英親睦や親善図っている組織もある[(注3)]が、日本に帰国する予定の人々を視野の中心においた組織であり、永住や長期滞在の日本人に特化したものではない。そうした中、滞在が長期化する日本人や永住を決意した日本人が集まり、互助会のような組織をめざして1996年に発足したのが、「英国日本人会」（Japanese Residents Association）であった。同会は2011年に英文名をJapan Association in the UKと変更し、2012年には正式にチャリティ団体として認定・登録された。会の目的は、「英国に定住する日本人相互の親睦を計り、ボランティアの精神に基づいた互助と福祉活動を促進することであり、そしてまた英国日本人社会の発展に寄与すると同時に、日英国際理解の橋渡しの役目」を目指すとされている[(注4)]。

主な活動は、(1) 福祉活動（慰問、援助活動)、(2) チャリティ活動（英国日本人墓地管理、ブーツセール、東日本大震災援助など)、(3) 勉強会、セミナーの開催 （二水会、紅葉会、坐禅会など)、(4) 文化交流（ジャパン祭りの主催、ジャパニーズ・ガーデンパーティなど)、(5) 健康増進（英国を歩く会、カラオケ会、坐禅会など）となっており、高齢化する定住者を視野の中心におさめた活動であることがうかがえる。また、会員数300名余の多くが、国際結婚でイギリスに定住している、比較的高年齢の女性であることを特徴としている。

4．国際結婚で永住した日本人女性

さて、英国日本人会の発足には、国際結婚の日本人女性が大きく関わっていた。高度経済成長期をはさんでイギリスに渡った日本人の高齢化は進んでいる。故国を離れて50～60年の歳月が過ぎ、老後をいかに迎え有意義に過ごすかや、死やお墓の問題が関心事として大きく浮かび上がっている。加齢とともに英語を使うことが不自由になってくるという報告を耳にしたり(注5)、体験として英語が難しくなっている高齢者を目の当たりにすることもある。渡英当時、日本語を話す環境になかったことや日本語の使用価値が低かったこともあり、子供に日本語が継承されていない。英語が不自由になったとき、子供とコミュニケーションが取れなくなるのではないかという不安も抱えている。英国日本人会は、いざ援助が必要となった時のために相互理解を深め、援助が必要な人には手を差し伸べる相互扶助の組織として、英国に根を下ろした国際結婚の女性たちの拠り所ともなっている。

4－1．調査方法

英国日本人会の会員で高齢期を迎えている／迎えつつある国際結婚の女性10名にインタビュー調査を行った。対象となったのは、60歳代後半から70歳代後半の、ロンドン市内・近郊に居住している日本人女性である。表1は、この10名を離日の早い順に並べて番号を振り、関連情報を付与したものである。2013年3月に筆者が滞在したロンドンのフラットかホテル、対象者の自宅のいずれかを選択してもらい、各々2時間前後

の半構造化インタビューを行った。本稿に関連するのは、インタビューの内容のうちの一部であるが、10名の社会的背景、当時の状況、日本語保持、日本語の継承、日本社会と自己のアイデンティティのつながりなどに関して聞いた。

表1　インタビュー対象の日本人女性

名前 年齢	出会地	出会年	結婚年 (結婚年齢)	離日年 (離日年齢)	備考
①TM 76	日本	1960 前後	1960 (23)	1961 (24)	高卒後、京都の知人宅で焼き物などの勉強中、出入りしていた英国人と出会い、結婚。子供4人。
②MM 72	日本	1961	1963 (21)	1965 (23)	短大卒後、貿易会社勤務中、英語を教えにきていた英国人（柔道修行）と知り合う。子供4人。
③RP 70	日本 /船	1964	1966 (23)	1965 (22)	高卒後、大学の事務。ニュージーランドの友人宅訪問の船でイギリス人エンジニアと出会う。子供3人。
④LT 75	日本	1964 (26)？	1965 (27)？	1966 (28)	准看護婦をしながらカナダ移民の準備で横浜のカフェ勤務。英国海軍水兵と出会う。子供3人。
⑤NC 70	英国	1970 頃？	1974 (31)	1968 (25)	高卒後、貿易会社、アトリエ勤務などを経て英国の日本大使夫人付として渡英。アシスタント・バトラーと出会う。子供なし。
⑥EC 69	英国	1972	1975 (31)	1971 (27)	高卒後、外資系会社などに勤務し夜学で勉強。MA取得のため渡英。公務員で同じ寮に住んでいた夫と出会う。子供1人。

名前 年齢	出会地	出会年	結婚年 (結婚年齢)	離日年 (離日年齢)	備考
⑦CW 66	日本/ ベル ギー	1972 1983?	1972 (25) 1985 (38)?	1972 (25)	大卒後、航空会社勤務中、最初の夫(15歳程年上)と出会い結婚、ベルギーへ。後に夫が死亡(子供1人)。2度目の夫と85年に渡英。
⑧MR 67	英国	1978	1979 (33)	1977 (31)	タイピストの仕事を退職後、英語の勉強で渡英。同アパート居住の夫(20数歳年上)と出会う。夫2003年死亡。子供なし。
⑨MW 78	スペイン	1959年	1990 (55)	1990 (55)	高卒後、造船会社勤務。旅行中出会った化学コンサルタント(20数歳年上)と断続的に連絡。退職(55歳)後再会、結婚。夫2003年死亡、子供なし。
⑩KT 70	英国	1996?	2000 (57)	1996 (53)	大卒後、保険会社勤務。49歳で自主退職し日本語教師をめざす。英国留学、非常勤講師。下宿の主人と結婚。子供なし。

＊表中、「?」が加えられているのは、話の内容から推定した年齢。

2013.3 現在

4－2．離日の時期とグループ・カテゴリー

インタビューに応じた10名は、異なる社会的背景や経歴の中でイギリス人と結婚し、その後も様々な人生を歩んできた方々である(名前は仮名)。個別に行ったインタビューはそれぞれ2時間以上であり、人生を語るには短時間ながら、示唆に満ちた貴重な内容であった。本研究において検討するのはその一部であるが、内容全体に関しては、別の視点から考察の機会をもちたいと考えている。

今回の対象者の人生はケースごとに非常に多様であり、それをカテゴ

リー分けすることは無謀ともいえるが、ここでは便宜上、渡英の時期や年齢を基準に、第1グループ（1）、第1グループ（2）、第2グループと分けて考察を進める。

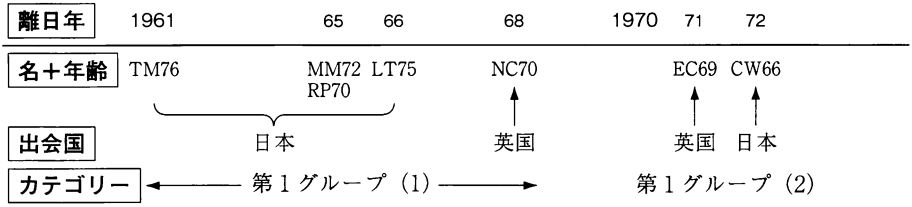
まず、第1グループ（1）に入るのは、①～⑤の海外旅行が解禁された1964年に近い時期に離日した方々である。それ以前の海外渡航は非常に強い規制を受けており、業務や視察、留学などの特定の認可し得る目的がなければパスポートが発行されず、一般の市民が自由に外国へ旅行できるような状態ではなかった。1964年4月1日以降の自由化で、観光目的の旅行が可能になり、年に1度、500米ドルまでの外貨の持ち出しが許可された。翌年には1回500ドル以内であれば自由に渡航が可能となり、次第に仕事以外の海外旅行が広がっていったのである。

なお、1961年に渡英した①TMも初期の渡航者としてこのグループに含めたが、解禁以前の渡航はそれ以降とは比べ物にならないほど難しかったと思われる。渡英に際しては日本国籍を捨て、イギリス国籍を取得している。

このグループの特徴のひとつとして目立つのは、①TM、②MM、③RPのように、いわば日本で「見初められて」結婚し、海を渡っていった女性たちである。学校を出てすぐ、海外に開かれた職場や環境に身をおいていた状況が、外国人と触れる機会を増やし、結婚へと進んでいったと考えられる。その一方で、④LTや⑤NCのように、自らの環境に満足せず海外に目を向け、厳しい状況を打破し新しい世界を切り拓く過程で夫に巡り合い、イギリスに根づいた女性たちもいる。

1970年以降に離日した女性たちである⑥と⑦を第1グループ（2）とした。この頃になると、海外旅行はさほど珍しくなくなっていた。しかし、海外に住むことや留学することはいまだ特別なできごとであった。⑥ECは働きながら夜学に通い、大学院の勉強を目的に渡英した。が、滞在先の寮で出会ったイギリス人と結婚し、そのままイギリスに生きる人生を歩んだ。⑦CWは勤務していた航空会社で夫と出会い、ベルギーへ渡って結婚した。やがて夫は病死し、2人目の夫とともにイギリスに移り定住した。ここまでを第1グループとしたのは、離日が比較的早い時期の方々であることと、その多くが年齢的に20歳代前半、遅くとも20歳代

図1　10名の結婚と離日年

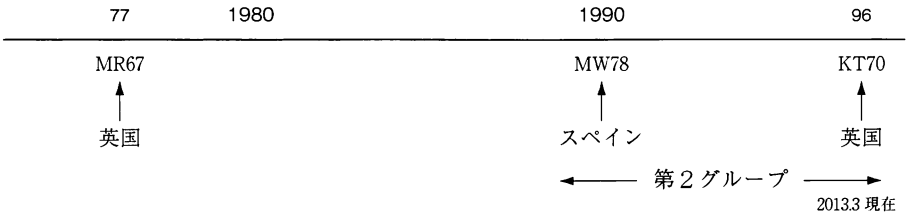


後半で日本を離れたという共通点をもっていることからである。第1グループ（1)、(2）の7人中6人が当初子育てに専念し（1人は年齢や病気がちの夫のことを考え子供を産まないことを選択)、周りに日本人がほとんどいない環境の中で、懸命に現地の生活に馴染んでいったことなども特徴的だといえよう。

さて、第2グループにまとめた⑨、⑩の2名は、第1グループとはまったく様相が異なる。1990年以降に、50歳を超えてから離日した方々である。⑨MWは実は非常に早い時期（1959年）に後に夫となる人とバルセロナで出会い、その後たまに手紙を交わしていた。55歳で長年務めた造船会社を早期退職した後、イギリスで再開して結婚に至る。20歳以上年齢が上だった夫を2003年に亡くして1人暮らしである。⑩KTも、50歳を目途に自主退職し、第2の人生として日本語教師をめざした。イギリスで日本語教師の養成校を卒業して教えていたころ、下宿先の主人と結婚。今はボランティアで日本語を教えている。

第2グループは、近年になって比較的高い年齢で離日したことと、そのため滞英期間がそれぞれ23年、17年と、第1グループと比較して短いことが特徴的である。子供がいないことから、イギリスの一般的家庭生活の経験がなく、イギリス人との交流の場も限られている。イギリスにおける就業経験が少ないことから、イギリスに身をおきながら、イギリス社会とはやや距離感のある生活を送っているといえるのではないだろうか。

さて、⑧MRは第1グループとも第2グループとも共通点をもちながら、どちらにも入り難く、いわば中間地点に位置するのではないかと考えた。



例えば、⑧MRの離日の時期は77年で、第1グループより遅れているが第2グループよりかなり早い。離日の年齢も31歳と、第1グループより高いが、第2グループよりはるかに若い。しかし、夫は20歳以上年齢が上だという理由もあり、子供をもたない選択をしている。また、2003年に未亡人となり、現在1人暮らしである。このような点は第2グループの⑨MWと共通する傾向である。夫がなくなって10年。そのままイギリスに住み続けながらも、友人や親せきがいる日本に帰るという選択肢の間で揺れることがあるという。

以上の10名の日本人女性にとって、英国日本人会は、故国を離れて異国で生きる日本人としての拠り所になっている。この会は、かつては個々に散らばって生き、それぞれの立ち位置で奮闘していた日本人をつなぎ、温かく助け合う相互扶助の精神を培っている。3－2．で見たような様々な催しやサークル活動が盛んに行われ、会員はロンドン市内や郊外から集まってくる。思う存分、日本語が話せる場所であり、日本食を持ち寄って分け合い歓談する場でもある。2011年3月の東北大震災をきっかけに、支援物資や支援カンパを募り、編み物や手作りの手工芸品などを共に作る場にもなった。英語では手間がかかったり得にくかったりする情報がすぐに収集できる場でもあり、閉じこもりがちな人が楽しみに参加できる場でもある。そして一人暮らしや未亡人にいざというとき手を伸ばし、いずれは自分にも手を差し伸べてくれることを期待する場でもある。齢を重ねるにつれて、異国の地で共に助け合うコミュニティが形成され、広がりを見せている。

5．日本語をめぐる言語生活の諸相

5－1．日本語の保持と日本の情報

長い人で50年以上、短くても17年のイギリスでの生活の中で、日本語はどのように保持され、日本の情報はどのように得られてきたのだろうか。第1グループの面々が口々に言っていたのは、当初は日本人に会ったり日本語を話したりする機会がほとんどなかったということである。日本の家族や友人とは、手紙でのやりとりが中心で、通話料が非常に高かった電話を利用することはあまりなかった。日々の生活で日本と深くつながっている感覚はなかった。

ただし、子供がある程度の年齢になったときに、通訳の仕事を始めたり、デパートや銀行、日本企業のロンドン支社などで働く機会を得た経験をもつ人は多い。日本語や日本の情報に飢えていた時代を経て、再び日本に触れていくという経過をたどっている。日本語の保持も十分できている。ただし、一般の日本人よりも言いよどみが多く、その言いよどみに英語的な発音が見られるケースもあった。また、インタビュアとの会話に、英語の単語が差し挟まれることも多かった。これは双方が英語が分かるということが共有されているため、安易に出てきた言葉を使ったからだと思われる（IRはインタビュアの略。以下同様）[注6]。

⑤NC：ケントに行った時だけが日本語話せなくて、もうーやっぱり日本語に飢えちゃってそんな時お金もないからロンドンにも行けないしね。オフデーにロンドンに行ったり。（中略）だからその時に日本の新聞が手に入ったらもう隅から隅まで読んで声に出して読んでました。

⑦CW：そうですねー。だから、あの頃、あのー、日本人だっていうと、もうそれだけで友達になっていた。

IR：あ、日本人が、お互いにね？

⑦CW：お互いに、それだけで。でー、やっぱり、その、それだけが理由で、バックグラウンドも知らないでお友達になっちゃったから、怖

い目に、怖いっていうか、ものすごい裏切られたっていうこともありましたですね。

②MM：通訳は、子供、最後の子供が6歳ぐらいになった時から（中略）
IR：じゃあまあ、一段落して、少し仕事始めようみたいな？
②MM：そうそう。そして通訳の仕事の良い点は、毎日勤める必要ないでしょ。

④LT67：だから、そうですね、あのー、子供、子供が、一番下の子供が5歳になった時に、あのー、だからタイピングを勉強して、それで、オフィスで働くようになったの。

時代が下ると、日本からの情報も物資も何でも手に入るようになり、望めば日本とほとんど同じような生活ができるようになっていく。今では、家の外はイギリス社会で様々な人たちが行きかうが、家ではJSTVという日本語衛星放送局と契約すれば日本のTVを24時間見ることができる。日本のニュースもほぼ同時に知り、日本の本を読み、日本の食料品で生活ができる。メール、スカイプ、インターネットなど、無料で日本の家族や友人とつながることもできる。年齢的にはおよそ同年代であるものの、1960年代に渡英した人が多い第1グループの置かれていた環境と生活は、第2グループのそれとはまったく異なっていたのである。

5－2．日本語の継承

第1グループの女性たちは、自分の子供への日本語の継承に関してはあきらめざるを得なかった。日本語を話すのは母親だけで、家から一歩出ると日本語を話す環境はほとんどなかったのだ。ロンドン以外では子供のための日本語学校や補習校もなかった。子供が少し大きくなってからでは、日本語の勉強に興味をもたせるのは至難の業である。さらに、今とは異なり、日本語が使えることの価値はあまり感じられなかった。インタビューの中では、子供に日本語を継承できなかった苦渋の思いが伝わってくる。

①TM：あのー、その頃は、子供が、上二人が大きくなったので、日本の補習校に入れてもいいなと思ったんですよ。ところが、入れないんです。その頃は、補習校は、（中略）あー、ちゅう、駐在員の子供でないと入れなかった。っていうのは日本語が分からない、日本語の話せる人達しか入れなかった。だから入れたかったんですけど、入れなかったんです。

②MM：でももうその時はもうもちろん１歳半ぐらいの時か、（連れてきたの）２歳半、２歳ぐらいかな？その時はだから（夫と私は子供に対してそれぞれ：筆者注）英語と日本語〈うんうん〉で、２人で話してたでしょ。そのうちに子供の方が、日本語はもうお母さんとしか通じないっていうの分かってくるともう英語で話すようになるでしょ。（中略）で、日本に子供連れて行って３ヶ月ぐらい居ると、子供ももう日本語覚えちゃうのよね。それで覚えちゃうんだけども、ああ、これで上手くいくかなと思って、こっちに連れて来るでしょ？（もう＊＊）飛行場からもう英語なのよ｛笑｝。着くともう英語だもんね。

④LT：で主人はね、いうんですよ、子供にどうして、あのー日本語教えないかって、だけど、自分であのー英語を、あのー、自分、は、母親自身がね、英語をあのー、勉強、ね、うまく、しゃべれるように、あのーしてる所に、両方できない人は。そうでしょ、（中略）結局、自分で英語でー、英語の方が早いのね。何ていうの、Don't do that、っつってね。日本語だとね。やめなさい、とかそうそう｛笑｝。だからーあのー、勿論、あのー商社の方々なんか、あ日本、子供を、土曜日の学校とか、＜うん、うん＞あのー送ってますよね。＜ええ＞だけどそんな余裕なかった。

⑥EC：そうですね。その前はね、その子供を育てるのに、２つのlanguageでは子供がconfuseするとね。ですからそのー１つの言葉で教えろと。特に娘は問題があったのでね、もう英語で育て

てくださいということでね、もう向こうの病院とかなんかはもうすごくそれを強調しました。（中略）今から考えると本当に残念なことしたと思いますけれどもね。だけれども、うん、あの結局は、それに１つはね、私の日本語に対する、考え方っていうのは、日本語は美しい言葉で、素晴らしいと思うんですね。ただ、日本語をちゃんと覚えるには、周りにいろんな人間関係があって覚えられる言葉でね。というのは謙譲語、いろいろありますでしょ？で、それを、覚えずに、ただ一方的に母親の言葉っていうのはね、非常ーに偏った日本語、どっちにしろ。

⑦CW：あのねえ、6歳、まで話してたんです日本語。
IR：子どもにはー、あの、日本語で
⑦CW：全部日本語で、話して、//彼女も、日本語で
IR：彼女も日本語で返してたの。それは、向こうで？ベルギーで？
⑦CW：ベルギーで。そしたら、ある日、とっつっぜん話さなくなったの、どういうわけか。（中略）「どうして日本語話さないの？」って言ったら「シェパ～」とかって言って。「シェパ～」か何が「シェパ～」かと思って。それでー、なんかそのうちにフランス語になっちゃって２人で。

大人になった子供たちが、日本に長期に滞在して日本語を学んだケースや、結婚してその子供に日本語のDVDを見せている例などがあるように、何らかの形で日本語や日本文化を再学習したいという希望をもつ子供もいる。また、日本語は継承できなかったものの、日本の伝統文化やものの考え方を伝えていきたいと願う女性たちも少なくない。

一方で、日本という背景や日本語について、さほどの執着がない子供もいる。協力者たちのそれぞれの生き方や環境、日本との距離感などの様々な要素が関与して、個々に日本語と日本文化の継承の度合いは異なる。

5－4．日本的な生活様式の保持

長いイギリス生活の中でも、日本的な生活様式や規範が頑固に守られている部分もある。例えば、食事に関していえば、全員の家庭で日本食が日常的に登場している。日本語は話さなくても日本食は大好きな子供たちが多い。また、孫を連れてやってくる子供たちに日本食をつくることを楽しみにしている協力者や、子供の友達からやさしく食事を作ってくれる母親として慕われた経験をもつ協力者もいる。

シャワーではなく、お風呂に毎日に入らないと気持ちが悪いこと、布巾と下着はいっしょに洗濯機に入れないこと、お皿に泡がついたままの食器を乾かす方式には我慢できないことなど、イギリスでは普通に行われていることも日本人としては受け入れがたい。さらに、靴を脱ぐ生活をほぼ全員が貫いており、客にもそれを要求していた。ガスや水道の修理や検針などで泥靴でやってくる人には、ビニールのカバーを用意したりして汚れを食い止めるが、どうしても関係が悪くなりそうなときは諦める、といった判断の基準などもほぼ同じであることが興味深い。

何が気持ち悪く何が受け入れられるかといった、生得的ではないにせよ文化に根差した好悪の感覚は、日本を離れて長く他の文化に住んでも、選択の余地のある限り、保持されやすいものと思われる。

5－5．日本への複雑な思い

イギリスに住みながら日本的な部分を大切にしている協力者の日本観とはどのようなものなのだろうか。ここでは、日本に住むこととイギリスに住むことの違いに焦点を当てて考えてみる。

今回インタビューした協力者は、若い時から海外へのあこがれや、一度は住んでみたいという思いをもっていた。第1グループはそれを若いうちに実現させたということができよう。しかし、第2グループは、日本で長い間仕事をした後に日本を去った方々である。⑧MRを含めて、年齢が高くなってから渡英した協力者は、日本社会の圧力に関して言及している。

⑧MR：和文タイプの。あの一公文書とかいろいろ。それをしていたん

ですけど、なんか、結構いい年でもあったんでその30過ぎていて、なんか段々生きづらくなりません？（中略）そう。しづらいというより周りからほら、独身の、独身でいつまでも親元に居てっていうと（中略）あの、結構、あの、いい年だから、なんとなく居心地が悪くなってきたんです。職場ではそうでもないけどでもなんかちょっと。（中略）だからなんかもう私いいやとか思って〈うん〉、まあ外国に行きたいってこともあったので。

⑩ KT：ええ。特に私みたいにこうーね、傷があると日本の人はこうジロッと見たりとか。（中略）そうですね、あの、年に1回、だいたい帰ったときには、親しかった友達とは会いますけれど、やっぱり、学生時代の友達はあまりいませんね。小学校、中学、高校の友達とは、あのー私も、私自身もいけなかったんでしょうけど、とても嫌な思いをしてますから。（後略）

IR：やっぱり日本の社会、の生き、生き難さっていうか窮屈さみたいなのを感じてらしたんですかね？

⑩ KT：うん、それもあります。もうー、ね。噂とか。会社に居たときも、そうですよね。今なんかだったらいじめになるのか、あの、パワ、パワ、ハラスメント

IR：むか、昔は、東京、あのー日本では立ち入ってこられてるような、気がしました？

⑨ MW：うん、つってもあたしは、その頃、{笑いながら} 変な女だったから。突っぱねてましたけどねえ。ほら、日本はそれと、何やったらお礼しなくちゃいけない、何やったらお礼しなくちゃいけない、それとかさあ、ご機嫌、お元気ですかとかって、そういうのやらなくちゃいけないじゃないですか。（中略）会ったこともない人の、子どもの学校入ったからとかって、義理、義理っていうんですか？そういうの。それが多いから。私そういうの、ほんとにしたい、人だとしたいと思う、人間ですからね。（イギリスは（筆者注））そういうのがないしー、まずプライベートの中に

入ってこない？のが好きですね。でも夫婦だってそうでしょ？入ってもらいたくないってこと、あるじゃないですか。だからあたしはやっぱ｛笑いながら｝変わってんですかね。

57歳で夫を亡くした⑧MRにとっては、日本に帰るということも選択肢の中にはある。しかし、イギリスに住み続けたほうが年金の受給で有利であるというほかに、日本に帰って自分が再び馴染めるかも分からずためらいを感じている。

⑧MR：もうすでにあのー会う、会って話すと、あのー昔のお友達？普通に話はできるけれども、やっぱりあの環境が違うし、離れているあのー離れていた時間も長いので、ま、たまに会ったくらいじゃちょっとあのー、うん、違いって言えないかもしれないですけど、なんとなく、こっち側のもうあの基礎が、こっち側の雰囲気になっちゃってるので、日本でちょっと暮らしづらいかな。まあ日本に行けばそのように暮らせるでしょうけどね。だから日本のお友達も大事だし、あのーいつまでもお友達でいて欲しいけれども、そう、だからといって日本に帰る気はないですね。

子育ても終わり、身軽になって、日本に帰ることや日本を旅行する機会を楽しんでいても、日本に住むことにはあまり積極的ではない。イギリスの生活に慣れてしまったからというだけではない理由もあるようだ。

②MM：今でも、今はもうあの、２年に１回ぐらいずつ日本に帰ってくるけどね〈うん〉。余生、それこそ最期の５年ぐらい日本で過ごすかって、それで日本で死ぬかっていう気はあんまりないね。（中略）日本に２、３ヶ月居たときね、やっぱり嫌になっちゃうのね日本が。（後略）

やっぱり日本の古式、古い考えだとなんかが。兄となんか、兄なんかたちはかなりインテリな人で、話してて何でもなく話し

てるんだけど、やっぱりその、日本の古来の、何ってすぐ今例出せないんだけどね、頑なにその日本の狭ーい考えが時々兄の中からか出てきて私はもうそういうのもう卒業してこちらにいるからね。なにお兄さん、そんなのまだ考えているの？なんて言うと、当たり前じゃないかなんて言うと、ああやっぱり私は日本住めないっていう。（中略）だからああ３ヶ月、ああこれはもう潮時だなって思ってこちらに戻ってくる。こちらに戻ってくると、まあ安心して、そのくせ日本が気になって。だからね、根無し〈うんうん〉草って感じよ。どっちつかず。アイデンティティ。

IR：そうかー。でもあのー、じゃあその、御主人、がなくなった後ね？その一、日本に帰るとかいうチョイスは、自分でお考えにならなかった。

⑨MW：みんなにそれ聞かれるんですけどねえ、日本に帰っても１人なんですよ、私。でしょう？いくら、兄弟がいても。近所に住んでるわけじゃないし。で友達も年々減ってくんですよ、はっきり言って、この年になると。で、会おうって言ってもどこそこが悪いとか、ここそこ、わかります？だから、どこに１人で住んでもおんなじだ、と思ったの。でこの国はあたしには｛笑いながら｝合ってるような気が。

④LT：何かねーやっぱりあまりほら、あー子供の時に苦労してるから、もう日本を忘れたかったの。日本に住んでるとね、ものすごいあのー、あー、自分の、あのー、苦労したことをいつまでもこう、あのー、思い、で、あー、でアメリカから帰ってきてね、あのー横浜の、あのー寮にいつも看護婦してる時は寮です、で彼と結婚して、でこっちへ、来る前にあのー、アパート小さいアパート、あの、借りて、考えたのは、こんな所でね、隣の人もすぐ隣の人も、あの、家族がいるのに、ひと部屋に住んでる、＜うん＞私なんか、とんでもないけど、あの、日本で貧乏するの嫌だと思ったの｛笑｝。

境遇の違いや渡英のいきさつは様々でも、イギリスで生きた時間と築いたものの重さは大きい。日本人であるという核の部分は残しながらも、それぞれの人生はいまやイギリスにあるというのが結論であろう。

6．おわりに

本稿では、戦後の高度成長期の前後に国際結婚をしてイギリスに定住した日本人女性たちを中心に取り上げた。越境する日系ディアスポラの早期の例として、本稿の前半では老年期を見据えて形成されていった日系コミュニティの軌跡を追い、後半では、10人に行ったインタビュー内容を引用しながら、日本語の保持と子供への継承、日本文化の規範や伝統へのこだわりと自己のアイデンティティの関係などを考えた。現在、子育て世代の日本人女性の調査を進めているが、それと比較することによって、ことばとアイデンティティの関係に新たな光を当てることができると考えている。今後ますます大きくなると思われる国際移動の渦の中で、日本語と日本語話者の現在と未来がいかにあるべきかを考える一助となることを期待したい。

注

[1] 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（課題番号23652089　研究代表者三宅和子）「日系ディアスポラのコミュニティ、言語使用規範、アイデンティティ」の補助を受けている。
調査にご協力をいただいた英国日本人会の役員の方々，10名のインタビュー協力者の方々に心よりお礼を申し上げる。

[2] 長州五傑（Choshu Five）と称され、2013年には150年目の節目を記念して日英で式典や催しが行われた。しかしイギリスに渡った日本人は、1831年、温州灘で暴風に遭い難破した尾張国出身の船乗り音吉が最初である。

[3] Nippon Club（日本クラブ）のHPによる。
http://www.nipponclub.co.uk/（2013.9.15）

[4] 英国日本人会のHPによる。http://www.japanassociation.net/（2013.9.15）

[5] ニューヨーク日系人会、邦人・日系人高齢者問題協議会（2006）『邦人在米邦人・日系人の「高齢者問題に対する意識調査」』による。
http://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/h5/Report.pdf（2013.10.11）

[6] 文字化の要領を以下に示す。

//	その後の部分が次の発話と重なることを示す。
(文字)	聞き取りが不確実な箇所であることを示す。
｛ ｝	笑いなどの非言語行動を示す。
?	その部分が上昇調で発せられたことを示す。
。	発話末が下降調で発せられたことを示す。
、	ごく短い沈黙。さらに発話が続く可能性のあることを示す。
＊＊	聞き取りが不可能であったことを示す。
＜文字＞	聞き手のあいづちを示す。

参考文献

アパデュライ A.（2004）『さまよえる近代』門田健一訳、平凡社、原文 1996 年

カールズ S. & M. ミラー（2011）『国際移民の時代』関根政美・関根薫訳、名古屋大学出版会原文 1993 年

藤田結子（2008）『文化移民―越境する日本の若者とメディア』新曜社

Itoh, Keiko（2001）The Japanese Community in Pre-War Britain. London: Curzon Press.

岩崎久美子（2007）『在外日本人のナショナル・アイデンティティ』明石書店

川上郁雄編著（2013）『「移動する子ども」という記憶と力』くろしお出版

額賀美紗子（2013）『越境する日本人家族と教育』勁草書房

多言語社会研究（2008）『ことばと社会』11 号　三元社

多言語社会研究（2010）『ことばと社会』12 号　三元社

参照 URL

外務省領事局政策課（2012）「海外在留邦人数調査統計 平成 24 年版」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebPrint.pdf（2013.10.1）

ニューヨーク日系人会、邦人・日系人高齢者問題協議会（2006）『邦人在米邦人・日系人の「高齢者問題に対する意識調査」』
http://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/h5/Report.pdf（2013.10.1）